みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

日本アンデス考古学調査団を支えた人々：ウーゴ津田さんへのインタビュー

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-03-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 関, 雄二 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00008356

研究者寄稿

日本アンデス考古学調査団を支えた人々
ウーゴ津田さんへのインタビュー

関　雄二（国立民族学博物館教授・アンデス文明研究会顧問）

ウーゴ津田さん

津田さんは、日本の考古学調査団と50年もの間、付き合われ、支援してこられました。まず調査団との出会いは、いつ頃でしたか。

—1958年のことでした。私は首都のリマ生まれですが、55年に父がリマの理髪店をたたんでワヌコの町に引っ越しました。ワヌコで父はタイヤの修理を始めました。そこにやって来たのが東大調査団でした。

私はまだ14歳で、子供でしたが、父たちワヌコ市の日系人が歓迎のための委員会を組織したことを覚えています。日本からいらした石田英一郎、泉靖一、寺田和夫の3先生を、日系人の島津さんが経営するホテル・ナシオナルで迎えました。私は子供でしたから、出席していませんけれど。その翌日、先生らは、コトシュ遺跡を訪問したようです。58年はそれだけでした。

その頃、ワヌコ市には日系人は何家族ぐらい住んでいたのですか

—たしか11から12家族ぐらいです。レストランを経営している人が多かったですね。それからパン屋やホテルをやっていた人もいました。

1960年に調査団は、コトシュ遺跡で発掘を始めましたが、日系人の方たちの反応はいかがでしたか。

—とても興奮しましたし、気持ちが高ぶりました。あとは、とても新鮮さを感じました。というのも、調査団は、当時、日本からほんとうに細々としたものまですべて船で運んできたからです。鉛筆やノートまでもです。トンボ鉛筆だったかな。鉛筆は今でもうちにあると思いますよ。調査団がお金持ちだったという印象はありませんでしたが、木箱から出てくるものが珍しくて仕方がありませんでした。

私がとくに気に入ったのは、マルハの缶詰でした。鯨の大和煮やミカンの缶詰が絶品でしたね。それから忘れられないのは、インスタント・ラーメンです。発売されたばかりだったのでしょう？調査が終わって、撤収する頃、油が悪くなったからと、残ったラーメンを燃やしていたのを、なぜくれないのかな、と私たちは思っていました。

調査団員と日系人の方たちとの関係はどのようなものでしたか。

—調査団の人たちは週末、遺跡巡りをよくしていましたから、ときどき車に空きがあるときは同行しました。植物学者の前川先生と一緒にティンゴ・マリア市の方に行って採集を手伝ったこともありました。私は父と違い、日本語があまり話せませんでしたから、こうした調査団の団員と付き合う中で言葉を覚えました。

それから、父は、理髪店をやっていたことがありましたから、よく調査団のキャンプに行って団員の髪を切っていました。それからうちではタイヤ修理に使う蒸気釜があったので、お風呂も沸かしました。60年の調査は遺跡の隣接地でのキャンプ生活でしたから、団員はお風呂が恋しかったのでしょう。お風呂と言えば、日系人の野田さんは、のちにワヌコ市で風呂屋を開くことになります。そうそう、野田さんの家は、郵便局の私書箱を持っていたので、団員宛の日本からの手紙はすべてそこに届くようになっていましたね。

あとは食事ですかね。リマからときどき山芋を送ってもらい、トロロ汁にして団員にふるまいました。喜んでいましたね。

それに、なんと言っても踊りのことが忘れられません。泉先生を始め、団員は皆踊りが好きでした。63年の調査では、暮らしもテントからプレハブ宿舎に代わっていましたが、調査団は宿舎の横に、セメントでダンス用の場所を作りましたよ。でも表面をきれいに仕上げていなかったので、私たちの皮靴がすり減ってしまいました。団員の靴は堅く立派なものだったので、平気でしたけれどね。日系人の女の子は、日本から来た若い団員が目当てでよく踊りにいきました。大貫さんも若くてもててましたね。

こうして調査団員と日系人とは、年を経るに連れてだんだんと親しくなっていきました。

調査についてはどのような印象を持たれましたか。

—正直言って、日系人の間では、調査の意味はよくわかりませんでした。わざわざ遠く日本からやってきて、よく昔の遺跡をほじくり返しているね、などと皆が話していたの思い出します。

交差した手の神殿が見つかった時もですか？

—発見そのものは、すぐにはわかりませんでした。日系人の間では、あまり騒ぎにはならなかったと思います。それでも、見てみたいと思い、調査団専属の運転手の大城さんに、席は空いていないのか尋ねたことを覚えています。でもレリーフをみたときは、「なんだ泥の手か」と思っただけでした。

1966年には、私たち家族は、再びリマに引っ越しましたが、ときどき遊びに行きました。交差した手のレリーフの片方が壊されてしまい、残った一つをはぎ取ってリマの博物館に収めようというとき、そのレリーフはしばらく私の家に置いてありました。リマに持ち出そうとした大貫さんたちは、ワヌコの人たちの反対にあい、しばらく動かせませんでしたね。その後解決して、今は国立人類学考古学歴史学博物館に飾ってありますね。

リマに再び出てきた津田さんは、引き続き調査団の支援をしてこられました。私もよく通ったあのビクトリア地区の大きな倉庫について聞かせてください。

—あの倉庫というか場所は、父が買ったものです。車修理の技術者の資格をとりたかったのですが、その勉強を続けるか、それとも買った土地を使って働くか選べと父から言われました。結局働くことを選んだのですが、すぐにお金になるのは車修理よりもレストランだと考え、父とともに経営を始めました。工場にしようと思っていた大きな空間は、調査団に無料で貸すことにしました。日本から持ち込んだ機材や、出土品なども、そこに置かれました。関さんもよく来て、木箱に詰めたりしていましたね。

最近では、調査に参加する若手研究者や学生が津田さんの家に泊まっていますね。

—今の家は、1985年に建てたものですが、以前のレストランがあった場所には、関さん、松本さん（現東海大学）、坂井さん（現山形大学）も泊まりましたよね。新しい家には、1994年頃から若い人たちが泊まり始めました。ちょうど、私の長女のヨシエが、20歳の誕生日に急に亡くなり、気持ちが沈んでいた時期でした。そこに渡部君（現南山大学）や鶴見君（現埼玉大学）がやってきて、気が紛れ、立ち直ることができました。私の方がお礼を言いたいぐらいです。最近の若者の行動にはいろいろと批判がありますが、ここに泊まる若者たちに仮に悪いところがあったとしても、よい面の方が多いので、すべては帳消しですね。

どうもありがとうございました。

C

インタビューを終えて

私が初めてペルーの地を踏んだ日、ちょうどウーゴ津田さんの御尊父（楽二さん）が亡くなられ、津田さん宅で通夜が開かれていました。喪服の日系人、そしてお経を上げる導師、食卓の上に盛られたペルー風お煮染めなどが、私の頭に残像として残っています。以来、ウーゴさん宅に泊まったり、倉庫にある荷物を取り出したりと、毎日のように通い続けました。行くと、すぐに何を食べるか聞かれ、レストランの厨房脇の部屋でごちそうになりました。自分の勉強のこともあり、ウーゴさんとは必ずスペイン語で話していますが、このおしゃべりが楽しくて仕方がありません。ペルーに関する知識でどっちが物知りか、今でも競い合っています。私が知らないことを見つけたときの、うれしそうな顔ったらありません。

またウーゴさんは大のNHK海外放送ファンで、連続テレビ小説の展開や、必要もないのですが、日本の天気まで教えてくれます。今ではレストランもたたみ、ときおりテレビや新聞社のコーディネーターの仕事を引き受けています。悩みの種はアンデス文明研究会の会員が頼むガイドです。聞いたこともない遺跡の名前をあげ、そこへ行きたいという要望に応えるのは大変とか。今年62歳になられます。いつまでもお元気で。

プレハブ宿舎で将棋を指す津田楽二さん（左）と友枝啓泰さん（右、現国立民族学博物館名誉教授・民族学）。見物しているのは左よりウーゴ津田さん、佐藤久さん（現東京大学名誉教授・地理学）。1963年コトシュ遺跡